

人理を守れ、エミヤさん！

安室聆

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

士郎に憑依した男がセイバールトを駆け抜け、十年後にカルデアにスカウトされちゃったお話だよ！

目次

成し遂げたぜ士郎くん！

1

成し遂げたぜ士郎くん！

——シロウ。

黄金に煌めく朝焼けを背に、淡い微笑みを湛えた少女が愛おしげに少年の名を呼ばわった。

穏やかな風。柔らかな空気に溶けるように、少女は夢げに佇んでいる。名を呼ばれた少年は、胸中に押し寄せる様々な感慨に声を詰まらせてしまい、何も言えずにその貴い幻想を見詰めていた。

少年のその顔を見ていると、少女の脳裏に万の言葉が満ちていく。それがなんだか気恥ずかしく、同時に誇らしくもあった。語り尽くせぬほどの想いがある、それは自分が彼のことを、何よりも大切に思っているという証だろうから。

だけど、もう時間がない。だから、少女はたったひとつの言葉に全てを込めた。

——貴方を、愛しています。

駆け抜けてきた生涯の中で最も愛した少年に、少女はその言葉だけを遺した。

朝陽が昇る。ふと、少年が気づくと、少女の姿はもうどこにも見当たらなかった。自分と彼女の間にあった”繋がり”も綺麗さっぱり消え去ってしまったている。

それはつまり、全てが終わったということ。

土蔵に少女——騎士王アルトリア・ペンドラゴンを召喚してから始まった全てが。

十年前の大火災から始まった悪夢のような日々が。

文字通り、血を吐きながら積み上げてきた魔術と武道の研鑽の日々が。

全て、終わったのだ。

少年——衛宮士郎は、万感の思いを込めて、たった一言だけ呟いた。

「——成し遂げたぜ」

——ある日、気がついたら衛宮士郎^{主人公}になっていた。

こう聞くと余りに馬鹿馬鹿しく、絵空事じみて聞こえるが、事実として俺は、ある時全くの別人に成り代わってしまったのである。

ネット小説などのサブカルチャーでよく見られる、憑依だか転生だかの不思議極まる不思議現象。それを自身が体験することになるとは想像だにせず、当初の俺は動揺するやら錯乱するやらで大忙しだったものだ。

なんで俺がこんな目に、とか。俺が憑依したせいで元の衛宮士郎がいなくなってしまうた、とか。自身の不幸を嘆くやら本当の衛宮士郎に対して罪悪感を抱くやら、ともかくにも俺は他の何かに手をつけることが出来ないほど余裕をなくしていた。

しかし、時間とは残酷なもので。

衛宮切嗣に引き取られ穏やかながらも忙しない日々を送るうちに、俺はいつしか現実を受け入れてしまっていた。

何はともあれ、泣いても喚いても何が変わるでもなし。ならせいぜい俺は俺らしく生きていくしかあるまい、と一ヶ月近くも経って漸く割り切れたのである。

悶々とした何かを無くすことが出来たわけではないが。それはそれとして、そこで俺ははたと気付いてしまったのだ。

——あれ？　そういや俺って、このままだや死亡フラグとダンスつちまうんじゃね？　何しろ俺は衛宮士郎である。あの、原作だとちよつとした油断や間違いであつさり死んじやう、命が軽い系主人公の筆頭格なのだ。

その俺が、のほほんと過ごしていいのか。少なくとも今の俺は、日本に数いる普通の青少年などでは断じてない。この身に特大の固有結界^{チト}を宿している。

怪異を持つ者はまた別の怪異を引き寄せる——型月世界に於ける因果のロジックから察するに、衛宮士郎が平穏な日々を送ることはまず不可能と云つても過言ではないだろう。

もし罷り間違つて遠坂凜のようなお人好し以外の魔術師に固有結界の存在を見抜かれたら、一発でホルマリン漬けの標本コース一直線である。そんなの嫌だ、と子供みたいに我が儘を言つてもどうしようもない。人間の悪意に際限はないのである。

それは別としても、衛宮士郎は衛宮切嗣の養子であるからして、切嗣の負の遺産とでもいふべき過去の因果も絡んでいる。愉悦麻婆とか、聖杯な姉とか。

つまり、何かをしてもしなくても、いずれ俺はなにがしかの魔術絡みの事件に巻き込まれるのは確定的に明らかということ。冬木から逃げてても聖杯な姉が俺の存在を知つ

ている以上、逃げた先に来られたら色々と言ひやうので逃げない。もし仮に聖杯な姉が来なくても、自衛手段もなく見知らぬ土地——どこに魔術師がいるかわからない場所——を歩けるほど豪胆にもなれない。

俺は死にたくなかった。

なんらかの強迫観念に支配されているのではなく、純粹に一個の生命として、命の危機を自覚し死を忌避する本能が目覚めたのだ。

ではどうするか、と言われても、これといって具体的な対策が思い付くわけでもなく。結局俺が出来たことと言えば、原作の流れを順守して、如何に無難且つ無事に生き延びられるか思案することだけだった。

俺が憑依したせいで、起源とか魔術属性が衛宮士郎本来のものと掛け離れたものになっているかもしれないという不安はあったが、どうやらそれは要らぬ心配だったように、切嗣に師事を仰ぎ魔術の使い方を覚えて試した結果、俺は普通に剣製に特化した投影使いを目指せるようだと判明した。

しかも、なんというか、魔術の鍛練の時には奇妙な感じがした。

体が衛宮士郎というガワだからだろうか。魔術の鍛練をしていると、魔術を行使しているのが俺じゃなくて、俺という魔術回路が勝手に作動している感じがするのだ。

つまり俺という人格とは別に、魔術を行使するためだけの別人格が別に存在している

ようなのだ。

俺が剣を投影しよう、何か別のものを解析、強化してみようと試みると、俺が具体的なイメージを持つていなくても、その刃物やら投影もとのオリジナルに込められた理念などへの共感、経験の憑依などが行えたのである。

まるで俺とは別に、本当の衛宮士郎が存在して、魔術専用の杖として俺の頭の中に存在しているような異物感があつて、途方もない吐き気がしたが、便利だったのは間違いない。最初こそ俺の中の投影杖（と便宜上呼称する）は練度が低く、原作冒頭の衛宮士郎レベルだったが、俺が彼の到達点であるアーチャーのエミヤを知っていて、衛宮士郎の異能的な投影魔術の概要を知っていたためか、めきめきと魔術の位階レベルを上げていった。

そうなつてくると、俺はある決断が出来た。自分の命がかかっているからと勇氣を出し、最初期の衛宮士郎がこなしていた間違つた魔術鍛練^{????}を行い、魔術回路の強度を高めはじめたのだ。

無論、俺がやれば一発でミスし、死んでしまつていただろうが、生憎俺の頭の中には投影杖がある。俺が魔術を行使しているわけではない以上、ミスの恐れはほとんどなかった。それほどまでに、俺は投影杖を信用、あるいは過信していたのだ。

軽率だったとあとから思ったが、まあ実際に魔術回路の強度を高めることには成功し

たと思う。それに、何故かは知らないが、自殺紛いの魔術鍛練を積んだ結果、本来の衛宮士郎同様の凄まじい集中力を得ることができ、副次的にあの驚異的な百発百中の弓の腕を得ることが出来た。

「当てるのではなく、既に当たっている」。原作で衛宮士郎がそう言っていたが、今ではその感覚がよくわかる。投影杖におんぶにだっこな現状だが、自身の能力が高まる感覚には不覚にも高揚する物があつた。

俺は魔術の鍛練に平行して体を鍛えつつ、あることを考えていた。

どうすれば俺はこの先生きのこれるのか。どうすれば、どうすれば。

——うだうだと過去の思考を垂れ流しても意味がない。結論として、俺が選択したのは「原作の衛宮士郎の生き方を投影すること」だった。

先の分からぬ未来である。中身平凡な俺が色々考えたって、衛宮士郎のような未来を得ることができるとは思えない。幸い、俺は衛宮士郎が生き残るための道筋を知っているし、忘れないように記録もしている。投影杖のおかげか副作用か、他者の物真似は得意だった。

不可能ではない、と俺は判断し。

実際に、ブラウニーのように活動して、衛宮士郎という壊れた生き方を実践できたと思う。

それはとんでもなく、苦痛だった。演じる内に、それが本当の生き方なのだど錯覚しそうにもなった。

だが、結果として俺は間桐兄妹と仲良くなり、桜と親密になり、慎二と決裂し、誰にも見抜かれることなく正義の味方に憧れる少年を投影できた。

そして、運命の夜。

俺は赤い弓兵と、青い槍兵の戦いを目撃し、心臓を破壊され、遠坂に助けられ、帰りでイリヤスフィールと出会い、槍兵の襲撃を受けて土蔵に逃げ込み、そこで騎士王を召喚した。

そこからは、怒濤のように時が流れた。

俺はかねてより考えていた通りに、セイバー・ルートを沿った。

遠坂ルートと桜ルートは俺的にリスキーに過ぎる。アーチャーと一騎打ちなんてしたくないし、英雄王を倒すなんて無理だし、桜を助けるためにバーサーカーとかセイバーを倒すのはもつと無理。その前にアーチャーの腕を移植しても、中身が俺だと適合するかわかったもんじやない。

最も難易度が低いのが、セイバーのルートだったと思う。無論、だからといって簡単に済むはずがなく、綱渡りの連続どころじゃなかったが、それでも俺は完璧にやり遂げることが出来た。その過程でセイバーと懇ろな関係になるという役得もあったが、まあ

多少はそういうご褒美があっても許されるはずだ。

そうして、紆余曲折を経て、俺は原作通りにことを終えることが出来た。

最終決戦を終え、セイバーが消えた瞬間。

俺は、絶頂した。

ぶっちゃけ射精した。

十年単位の一大事業を成し遂げ、俺は途方もない達成感と多幸感に包まれ脱力してしまつたものである。

それから俺は、衛宮士郎を演じるのをすっぱりとやめた。

俺はやり遂げたのだ。全ての地雷を回避し、地雷になりそうなのを桜以外撤去完了し、もう俺が俺を偽る必要性は消えたのである。

と言つても、長年のツケが回ってきたためか、無意識の内に衛宮士郎の如くに振る舞つてしまつたこともあるが、それでも俺にはそれを演じている自覚がないために重荷に思うこともなく。俺は何事もなく高校を卒業し、半ば飛び出るようにして冬木から旅立つた。

そして、まあ、なんというか、正義の味方を志していたわけではないが、気がつくとなんか海外を回り、慈善事業に手を出して、飢餓に苦しむ人々のために可能な限り援助の手を差し出し続けていた。

学校に通うこともできない貧しい子供たちのために、俺が教えられる範囲で勉強を教えてあげて。建物を建てる方法を学んでそれを教えてあげたり、まあ、思い付く限りに力を尽くしていた。

楽しかった、というわけではないが。まあ、遣り甲斐はあった。正直なんでこんなことをしているか分からなかったが、別にお天道様に顔向けできないことをしているわけでもなく、俺は真っ当に生きているという自負があった。

魔術や弓、剣を用いた戦いの鍛練は怠らず、世界を回っていると目につく外道な魔術師を打ち倒し、死徒やらなんやらの裏の抗争に巻き込まれたりしたが、まあ後悔はない。俺は自分が大好きだから、誰かを救うために世界と契約し守護者になるようなこともなく。俺は俺の人生を生きていた。

そんな、ある日のことだ。

俺の元に、ある女性が訪ねてきた。

女性はオルガマリー・アニメスフィアと名乗り。

「衛宮士郎。冬木の第五次聖杯戦争の勝者である貴方を、私のカルデアのマスター候補にスカウトしにきたの」

そういつて、俺にかつてない衝撃を齎した。

——え？
ここってF G O世界だったの？